

# *Desire under the Elms* における対立

木 村 俊 夫

「地のあらん限りは、播種期、収穫時、  
寒熱夏冬および日と夜息むことあらじ」  
(Gen. viii. 22)

(1) O'Neill のある<sup>①</sup>手紙の一節に次のような言葉がある。「私は常に背後の力(宿命, 神, 吾々の現在を創り出す吾々の生物的過去, それを何と呼ぶとしてもたしかに神秘である)や又, 獣がそうであるようにその力の表現の時の微少な小事件にしかすぎないのではなくて, その力をして人間を表現せしめる人間の輝かしい, 自己破壊的争闘における永遠の人間の悲劇を強く意識する。」<sup>②</sup>*Desire under the Elms* にもその随所にえたいの知れない「何物か」が徘徊し, 登場人物もしばしばそれを意識する。さてこの力, 「何物か」, に動かされている人間とその世界, 即ちこの劇中の人物と環境を観察する時, そこに幾組かの対立, 乃至対照が発見され, それ等の対立, 対照がこの作品の「輝かしい, 自己破壊的争闘」を支えているように思える。以下にその諸相を指摘したい。

(2) 便宜上, 作品の結末の部分の引用からはじめる。

*Cabot*. 二人とも連れてっておくんなせえ。(進出る——不承不承に感嘆の気持を幾分みせて *Eben* を見つめる) お前にや——ええ葉じや! どれ, これから家畜を集めなけりや。じや, あばよ。

*Eben*. あばよ。

*Abbie*. あばよ。(Cabot は向きをかえて, 保安官たちの側を大股で通りすぎる——外に出て, 肩をはり, 石のような表情で家の角を廻り, 冷然と納屋の方へ歩いて行く。その間に保安官と部下は部屋に入る。)

保安官、(間が悪そうに) では——出かけよう。

Abbie. 待って。(Eben の方をふり向く) わたしや、お前さんを好いてるよ、  
Eben.

Eben. わしもそうだ、Abbie (二人はキッスする。三人の男はニヤリとして、ばつが悪そうにのろくさと歩き廻る。Eben は Abbie の手をとる。男たちを従えて、二人は後ろの戸口から出て行く。手をつないで家を出て、門の所に来る。

Eben はそこで立止って、日の出の空を指す) 日の出だ。きれえじやねえか。

Abbie. そうだねえ。(二人はしばらく立ち止って不思議に超然とした敬虔な態度で、うっとりを見上げる)

保安官、(羨しそうに農場を見廻して——連れの男に) まったく、こいつはすばらしい畑だ。これがわしのものならなあー。

(幕) [3部4場]

この部分から次の事が指摘できる。

(a) 「すばらしい畑」をみて「これがわしのものならなあ、」とこの作品を結ぶ保安官は、この農家の外部の者であり、この作品の事件にはかわらない、いわば傍観者である。

(b) おたがいの愛を確認し合った Eben と Abbie はいさぎよくこの家から出て行く。この作品では、併し、この2人だけが主人公ではない。

(c) Ephraim Cabot の存在は、この作品では上の2人に劣らず重要である。彼は納屋の方へ歩み去る。つまり、外へ出て行く2人と反対に彼はこの家に独り止まるのである。

(d) 時はすばらしい「日の出」の時、早朝である。

以上の4点はいずれもこの作品の重要な事柄である。

(8) 早朝に終るこの劇は日没にはじまる。textによって更にくわしく各場の時の指定をみると次のようになっている。

1<sup>部</sup> 1場 1850年。夏のはじめ。日没時。

2場 夕闇の迫る頃。

3場 夜明け前の真暗がり。

- 4 場 夜明けの薄明.  
2 部 1 場 2 ヶ月後の暑い日曜の午後.  
2 場 夜の 8 時頃.  
3 場 数分後.  
4 場 夜が明けたばかり.  
3 部 1 場 翌年の晩春の一夜.  
2 場 半時間後.  
3 場 丁度夜明け前.  
4 場 およそ 1 時間後.

このようにこの作品では作者の指定した時に大きい、又小さいリズムが刻まれている。各部 4 場を以って構成するこの作品は、夏のはじめにはじまり、翌年の春の終りに結ばれる。それは 1 年という周期である。又各部は日没から夜明け前、午後から夜明け、夜から早朝という時間設定になっていて、舞台上の出来事は夜を中心に展開する。そして 3 つの部に 3 度訪れる夜を包んで作品全体は日没（1 部 1 場）から早朝（3 部 4 場）に推移するのである。こうした時の経過のさせ方は O'Neill のしばしば行う事であるが、此所で指摘しておきたいのは、1 年という周期の中に事件を包む事によって作者は自然の循環の中に人生をみようとしている事、又ひる、光の世界を殊更にさけて暗い混沌の夜に事件が展開する事である。即ち作者はこの作品で人間を社会の中に、というより宇宙の中に捉え、こうした人間のかくされた暗い内部をうかがおうとするのである。

(4) この事は空間の処理にも対応する。即ち楡の木に掩われた Cabot 家の内部と外部の対照である。こののはじめに、保安官はこの家にとって外部の者にしかすぎない事、Eben と Abbie は最後にこの家の外に出て行く事、併し Ephraim は最後まで独りふみ止る事をみた。更に登場人物の出入りをはじめからみてみよう。はじめには、Simeon, Peter, Eben の三人が

住んでいる。Ephraim は留守である。併しやがて彼は Abbie を伴って帰って来る、入れちがいに Simeon, Peter は家をとび出してしまふ。そして以後、Ephraim, Abbie, Eben の 3 人が一つの家に住む事になる。Abbie は外部からやって来てこの家の内部の者となった。Ephraim と Eben は元々この家の者である。併し二人の心は常にそこに安住しているわけではない。

50年ほど前、20歳の時よりこの家に住みはじめた Ephraim は曾ってはこの農場を捨てて西部への一行に加わった事があつたが、神の声をきいて独りこの農場に戻って来た。又この作品の終り近くで、皆に裏切られた事を知った彼はかねてかくしておいた金をつかんで California に去ろうとする、併しその金ももうない事を知るや、彼は観念して又もやこの家に止る事にする。Eben は Abbie を知ってからは Minnie にさへ会いに行かない。併し後で Abbie の奸計を知って絶望した彼は、先に追い出した兄達の後を追って California に去ろうとする。この時行われた Abbie の真実の「愛」の告白と懇請が彼をしばらくは家に止める。併し 2 人の愛の確認は 2 人の間に生れた子供を殺めるといふ大きい犠牲を伴っている。愛を得た 2 人は最後にわれから進んで、保安官にひかれて行く。主役 3 人の内、「愛」を得た 2 人はこの家の外に出て行く。独り残った Ephraim にはそうした愛はない。誰も遂に彼を理解してくれない。彼は唯彼の神とだけ残される。彼の神とは実は彼が空しく守ろうとする「我」の投影でしかない。

Ephraim が最後まで守った乃至は愛に昂め得なかつた「我」、これに執する限りこの家からは出られない。ではこの家の内に対して外とはどんな所なのか。作品に点々と配置された形象がそれを示している。それはまず太陽、乃至はその照る所、空である。結末の所でこの家を出て行く Eben と Abbie の二人はしばし家の門口に立ってすばらしい日の出に対する。これと対応して、作品の冒頭では、畑仕事から帰って今しも家の中に入ろうとする Eben も Simeon も Peter もが、うっとり夕焼の空に見入るのである。併し彼等が住んでいる家自体は大きい 2 本の楡の木にだきすくめ

られている。Eben はうっとり夕焼を見上げた後、いまいましように地面に唾をはいてから家の中に入って行く。此所での天と地の対照はまぎれもない。この地こそこの作品の主要人物を強くひき止めておく農場、農家のある所なのである。

尚冒頭の部分を読み進もう。夕日に見入った Simeon は亡くなった自分の女を想い出す。彼女は黄金色の髪の毛を持っていたのである。又すぐ続く対話ではこれが黄金、西部、金門湾、California 金鉱の遠想を呼び起している。西部とはgold rush の California であり、又死の世界でもある。

California の金と畑仕事、この二つに作者は農業主義と、商業—金融主義を対応させたのであり、1850年と指定されたこの作品は従ってこの時代のアメリカにおける前者から後者への移行を示すのである、とまで断定する事は余りにうがちすぎでもあろうが。併し少くともはっきり云える事は、この太陽、空、黄金色、金、California、西部、死と密接に連想される外の世界は、この家の内との対比において、抑制に対する自由、とじこもる孤に対する社会、我執の苦痛、高慢に対する、自己放棄の安易、又は——場合によっては愛の昂揚、そして又やりきれない現実から逃れ出ようとする者の夢のはせる所となっている。

この家の台所の壁の中央には満帆に風をほらんだ快走船の絵に大きな文字で California と書いた大きなポスターがとめてある。これがこの家にとじこめられた人間共の外への夢を映しているとみてよいであろう。「楡の木」にだきすくめられ、「石垣」にとじこめられたこの「牢」から、California の金、自由をめざして Simeon と Peter は出て行く。この家の「門」をひき外して。彼等には今や「端綱」は切れ、「馬具」ははちきれ、「柵の横木」は落ち、「石垣」はくずれおちたのである。彼等は船にのってでかける。陽気に唄を唄いながら。(1部4場) 結末部でこの家をはなれんとする Ephraim もふとこの唄を想い出す。「『おー、California—わたしの国よ』か。」「とびきり上等の快走船で出かけるんだ。」(3部4場)

この作品の内と外にふれたついでに云えば、この作品を純正な tragedy とみるかみないかは別として、作品の推移、結末が tragic 乃至 pathetic である事は否めない。併し作品のある部分はその調子はむしろ comical である。comical なものから tragic なものに関心が移る事、これは作者自らも告白した作者の一般的作風であるが、それはこの作品の場合、家の外から内へ、即ち O'Neill 好みの人間の外面から内面への関心、描写の移行に附随して起る現象である事を指摘しておきたい。

(5) この作品「楡の木蔭の欲情」なる表題の内、「欲情」が「愛」と対置されている事についてはすでにふれたが、この作品は二人の主要人物の中にある欲情が愛に転化し、今一人の主要人物においてはそれが果されなかったいきさつが描かれてある。では「楡」の方は如何なのか。これも作品冒頭における作者の描写によって、それが Eben の亡母の執念深い怨霊の役目を果している事は明らかである。併し「楡」の木にだきすくめられたこの農家は又「石」だらけでもある。この「楡」と「石」の対比もこの作品では顕著である。即ちそれはまずこの作品における「母」と「父」、その属性を示しているのであり、それが<sup>④</sup>一般的な樹木と石の属性を反映している。即ちこれは生命とそれの欠除の暗示ともなる。そして作中しばしば用いられる語 soft, easy と hard も、この母と父、楡と石との対比と結びつくのである。

この Cabot 家の一つの大きな特徴は、この家に女性を欠いている、という事である。石の象徴する Ephraim はこの家の主人である。併し Simeon と Peter の母であったはじめの妻も、Eben の母であった次の妻もすでになくなっている。従って母はこの作品では楡の形をとって怨霊となつてあらわれる。Ephraim のどの妻も彼を「理解」してくれなかった、長い心の「孤独」にたえかねた Ephraim が、春になって「神のお告げ」をきいて嫁とりに出かけたその留守中がこの劇の発端となっている。Sime-

on にも妻があったが、それも18年前になくなっている。この家には誰も女はいない。Eben はしばしば Minnie の許に通う。娼婦である。Simeon Peter のみならず父の Ephraim までがこの娼婦を知っているらしい。父と息子の醜い争奪はすでにこの事にもあらわれている。此所には父と息子はいても正常な「家庭」はない。それは Cabot 家という cosmos における天地の分離である。あるものはむき出しな「所有」に対する争いである。そこへ Ephraim に買われて Abbie がやって来る。彼女も不幸であった。「家」を持たなかった。小さい時から孤児で他家で働かされ、結婚した後も奉公せねばならなかった。折角生れた子供も、夫もが死んで、遂には自分には「家」は持てぬかとあきらめかけていた所へ現れたのが Ephraim であった。Abbie を迎えた Cabot 家は此所に父母子のいる「家庭」の外側だけは持つようになる。併しそれは決してまともなものではない。すでに Minnie との関係において示されていた1人の女をめぐる父・息子の争いが家の中に持ちこまれただけである。おたがいは愛の対象ではなくて憎しみの対象、即ち敵でしかない。

前の妻は夫の子を産んだが夫が「理解」できなかった。次に娼婦が妻として来るが、それは夫の子を生まない。逆に息子と通じてその子供を生む。併しそこからはじめて「愛」が生れる。此所に「娼婦」から「愛人」「妻」への転化が起るが、その愛の確認も切角生れた子供の死によってはじめて果される事になる。

(6) この物語りが1年の周期の内におかれている事ははじめに指摘した。次にはこれと Ephraim 及び Eben とがどのようにかわるかをみたい。1年という周期が春夏秋冬の季節の循環を含むものである事は云うまでもないが、この natural な季節が、人生の持つ biological な季節、即ち birth—childhood, puberty—adolescence, maturity—marriage, old age—death の背景にあってこの作品を動かしている。母なる大地が春になるとあらゆ

るものを育てるように、Abbie の到来は、この家における春の到来を期待させる。そして彼女をむかえる Ephraim は old age にあり Eben は maturity に達しようとしている。

自然の春に促され、<sup>⑥</sup>Ephraim は自分1個の中に春を恢復せんとして自らの biological な時、自分の非回帰性に空しい挑戦をする。75歳の老人でありながら、その元気、たくましさにおいて若い者に劣らぬ Ephraim は、三十年以上もはなれた事のないこの家を、2ヶ月前に、こんな事を息子 Simeon に云い捨て、讚美歌を唄いながらとび出して行った。西の方へ。

「一日中牝鶏はクッククック鳴きやがるし、牡鶏はコケコッコーとなきやがる。牛はモーモー呻るし、何もかもが騒ぎだしおって、まったくたまったもんじやない。春じや。わしや全くやりきれねー。」「燃やすよりほかしようのない枯れたクルミみてえに、どうにもやりきれねー。」「だが、わしが死ぬなんて馬鹿な事を思うなよ。わしは百まで生きると誓ったんだ、生きるとも、罰あたりの貪慾な貴様のつらあてだけにでもな。これからわしや予言者様がなされたように、神様の春のお告げを聞きに行って来るぞ。」（1部2場）

斯く彼は自らの老年一人生の冬に挑戦して、奇妙な形で自分を自然の rhythm に合せようとする。女のいる家庭を持ち、我の延長である「わが子」を持つために、併し Abbie を迎えて後も、自然の春にも夏にも彼には「暖かさ」は訪れて来ない。たえず彼は孤独であり、やけつくように暑い日でも彼は「<sup>⑥</sup>寒い」のである。彼はしばしば自分の孤独感をいやし、自分を「暖める」ために、自分の寝室をはなれて牛のいる納屋に行く。そこだけが彼には暖い所なのであり、牛だけが彼の気持を判ってくれるような気がする。彼は牛となら話ができる。納屋に眠る彼の夢みるものはおそらくはあの繁殖力の強い牡牛、そして<sup>⑦</sup>Osiris, Adonis, Attis, Dionysus の幻であったであろう。その彼に、Abbie によって子供が生まれた、と彼は思いこむ。彼は村人達を招いて盛大に「わが子」の誕生を祝し、76歳の自分の力



を誘示し、はげしく踊る。併し事實は彼以外の全ての人には判っている。彼はこの席でも最後にはどうにもそぐわぬ座の空気、おちつかぬ自分を発見して、納屋に休みに行く。彼も遂には「わが子」が Eben の子である事を知ってしまう。こうして彼の冬、老年へ挑んだ戦いは完全な敗北に終り、彼は冷えきった心をかかえて独りこの家に残る事になる。

いつも「冷え」を感じている Ephraim に反し、Eben には当然初夏の夜は、Minnie は「暖い。」実は彼の成熟した肉体自体に暖い血がたぎっているのである。この Eben、「オリ」に「捉われ」の身であり、又「野獣の眼」をした Eben はやがて Abbie という新しい「母」を家に持ち、自分の母にとって代らんとするこの女にはげしい憎しみを燃しつつ、いつのまにかその彼女にはげしい欲情を抱く事となる。この気持を抑えて Abbie を憎みきろうとする Eben に彼女は Eben は自然に逆っている、と云ってこう指摘する。

「お天道様は強くて暑いわね、それが地の中まで燃えて入って行くのが感ぜられるわ——自然が——だんだん大きく——ものを生長させようとしてお前の中で燃えてるんだよ——お前に大きくなりたい気をおこさせて——大きくなって何か別のものになる——それと一緒に——それがお前のものになる——けれどお前も又そのものになる——そしてお前を一層大きくする——木のように——あの楡のように——自然には勝てないよ。」〔2部1場〕

遂に Eben は Abbie の魅力に屈する、というより、自分の中の自然に屈する。そして亡母が棺に入れられてから開けた事のない部屋で Abbie をわがものとしてしまう。この事あって以後、Eben の Ephraim (彼は近視である!) に対する態度はがらりと変り「大胆な自信ありげな表情」になって来る。こうして生れたのが Ephraim がわが子と思いこんだ子供である。併しわが子を生んだ Abbie は父の妻としてこの家に来たのである。Eben は自分の子を自分の子と呼ぶ事はできない。誕生祝いの夜、何も知らぬ Ephraim ははげしく踊る。それは誠に奇妙な<sup>®</sup> dithyramb である。本

当は子供の父として「踊る」べきはずの Eben は 踊れない。祝いの席にも顔を出さず、一人快々と自分の部屋に呻吟するばかりである。獣のように所有を父と又 Abbie と争い、獣のように情欲に身をまかせた Eben に、今人間としての「愛」が漸くにめばえて来た。それ故にこそ Eben は苦んでいる。⑨の level にあった彼の今までの生活は漸く人間への昂まりを持ち始める。Abbie も今は Eben への純な愛によみがえっている。併し元々 Abbie が Eben の子を生む事を決心したのも下心あつての事であつた。彼女はその子を通して実はこの家をわがものとしようとしていたのであつた。Eben はたばかられた事を知る。そして絶望のあげくこの家を去って California に赴こうとする。この Eben の愛をつなぎとめ、自分の愛を確認さすためには、その子の「生れぬ前」と同じ状態に戻らねばならぬと Abbie は思う。そして本当に自分の手で子供の顔に枕をかぶせて殺してしまう。それは Abbie のはじめの目的であつた相続権、所有権の完全放棄であるが、子供自体は、春にそむいて、自らの母の手で切角めばえた命をつみとられてしまうのである。大きい驚ろきと怒りが Eben に訪れる。がそれは又 Abbie への愛をはっきりと確認させる事にもなる。2人は手をとって昂然と罪の裁きをうけに外に出て行く。かくの如くこの作品は、その中の人生的季節の各々、birth (Eben の子), puberty-maturity (Eben), old age (Ephraim) のみじめな破滅を通してはじめて愛の讃歌が唄われるのである。

この事実は、この作品と全く逆の経過を辿る別の一つの作品を横におく時、余計に強く吾々に迫って来る。

「時刻です。降りておいでなさい。もう石ではありません。出ておいでなさい。皆さんを驚かせておあげ。さ、お墓は私がふさぎます。動いて下さい。さ、出ておいでなさい、無感覚は死へ譲って。あなたはあの方から大切な命を償ってもらったのです。」

「冬にふさわしい悲しい物語り」 *The Winter's Tale* の、併しめでた

い結末に Paulina の言葉 (V. iii. 99—) である。此所にはあらぬ誤解と死と離散の不幸な物語り—冬—がめでたい和解と再生と再結合—春—で結ばれるのである。吾々の今見ている O'Neill の作品にはこうした Grace は全くない。

(7) 二つの反対原理 *philia* (愛) と *neikos* (憎) が相互に優位に立つ事が宇宙の永遠の創造と破壊を説明するものと Empedocles は考えたとい<sup>⑩</sup>う。O'Neill がこの Empedocles に負う所があったというのではないが、O'Neill も又「人間の魂の中にある相争う潮の干満という背後の型式」について語<sup>⑪</sup>ってもいるし「楡」を読む時うかび上って来るものは甚だこれによく似た宇宙—人生の図式なのである。この作品の行為はそれ自体を超える一つの大きな型に則っているかにみえる。一見写実的外観を呈するこの劇は実は表現主義的処理を多分にうけているのであって、上にみた諸相も実は作者の観念した人生のいわば図解として用いられている。

もう一度舞台を見よう。この家の内部は四つに仕切られている。2階にある父親の寝室と兄弟の寝室の二つ、及び階下の台所と客間である。この客間は Eben の母の死後開けられた事がなかったのが Eben が Abbie と通じる時にはじめて開けられる。その意味は露骨に示されている。Abbie が亡母の怨霊にとって代ってこの家の主婦となるのである。2階の2室についても問題はない。1は父の、他は、Simeon, Peter 去って後は、Eben の拠点である。そして階下の台所が、本来は家族が共に食い団欒するはずの「家庭」の場なのである。併しこの家に「家庭」はない。逆に台所は各家族の所有をめぐっての争いとかけひきの場となっている。

さて Eben の母と Abbie の対立、主婦の座の一方から他方への移行にもまして、そしてこの作品の他のどんな対立にもましてはげしい対立をみせるものこそ、父 Ephraim と息子 Eben である。Eben の亡母に対する思慕はこの母を殺したも同然の父へのはげしい憎しみをつのらせる。

Eben も自ら自分は「父の子」ではなくて「母の子」であると昂然と云い放つ。Ephraim からみても Eben は「母親に似てとても soft」である。併しそれは当人たちがおたがいをみてだけの事。2人はやはり実に似ている。Abbie も Ephraim に Eben は「あんたそっくり」と指摘するし、兄達からみても Eben は父親にそっくりそのままなのである。当然の事である。子は父と母から生れた第3の人間であり、同時に自分の中に父と母を持つという事ほど明らかな事はない。もっとこの作品に即して云えばこの「そっくり」の父と息子は、O'Neill の言葉によれば「潮の干満という背後の型式」即ち宇宙の rhythm のあらわれなのである。併しその移行には破壊を伴う。作者がこの作品で又多くの別の作品でも同じように描いてみせたのは、その3者のめでたい理解、調和ではなくて、むしろ3者の不調和、否1人の人間の中に宿る相調和する事のない対立的性質なのであった。

はじめにも述べた如く、この作品の背後には「神秘」な力がある。併し舞台にあらわにされたものは上に指摘して来た如き対立の世界なのである。これが人間の環境であり、条件である。然るに他者とのかわりにおいて、又自己の内部においても、相対でしかあり得ない人間が自己のはかない一の保持のために空しい戦いをする。相対、対立の状況の中では勿論戦いはある。併しそれも実は背後の「力」に動かされているのであり、人間はいわば戦わされているのである。破壊と創造という「潮の干満」の中では一つの自己など全くはかないものである。Eben の子は生れて間もなく殺された、この子はそういう形で一である事をやめた。Eben と Abbie は愛の昂揚を通してそれぞれが一に執着する事をすてた。併し Ephraim だけはあくまでこの家にふみ止って自らの一を守らんとする。この相対の世界においてまるで自分が唯一者、神であるかの如くに、「神様はきついお方じや」(God's hard)。(3部4場) こうして彼は自分の人間的条件に反抗し、自分を触発しはしたが、自分が適合する事はできなかつた大きな宇宙の中に孤独のままに止ろうとするのである。

## 註

1. 1925年に Arthur Hobson Quinn にあてたもの。Arthur Hobson Quinn, *A History of the American Drama. From the Civil War to the Present Day* (New York, 1936) Vol. 2. p. 199参照
2. text は *The Plays of Eugene O'Neill* (New York, 1947) Vol. I を用いる。
3. *Time* 1946, Oct. 21. 参照
4. この「楡」乃至は樹木と「石」の象徴的意味はその複雑な系譜は古く聖書、口碑の中にも辿られる。それはmercy 対 justice, change 対 permanence, 又 time 対 space でもある。近くは James Joyce, *Finnigans Wake* 又それにヒントをあたえたと思われる Joseph Sheridan Le Fanu, *The House by the Churchyard* 等にもこれの対応があらわれている。
5. Ephraim という名は皮肉にも “the fruitful” を意味する。因みに Eben (Ebenezer? “store of hope”) など、登場人物の名の Biblical Connotation の指摘は Edgar F. Racey Jr., “Myth as Tragic Structure in *Desire Under the Elms*” *Modern Drama* Vol. 5. No. 1. May, 1962 にある。
6. *Proverbs* 26:1— (「榮譽の愚なる者に違わざるは、夏の時に雪ふり、かり入れの時に雨ふるが如し……」) 又 *Ecclesiastes* 3:1— 参照
7. Sir James George Frazer, *The Golden Bough* (London, 1911) 特に Part IV の記事参照
8. Dithyramb は「新生の唄と踊りである。」Jane E. Harrison, *Ancient Art and Ritual* (London, 1913) p. 101 参照。又同書 p. 31 にある文 “It is strange to us to learn that among savages, as a man passes from childhood to youth, from youth to mature manhood, so the number of his “dances” increase, and the number of these “dances” is the measure *pari passu* of his social importance. Finally in extreme old age he falls out, he ceases to exist, *because he cannot dance*; his dance, and with it his social status, passes to another and a younger.” 参照
9. この農家の住人がいかに獣と同列に扱われているかは、この作品中に見出されるおびたしい数の獣及びその縁語によっても知られる。わけてもCowの使用は甚だ多い。
10. Mircea Eliade, *Cosmos and History, The Myth of the Eternal Return* (New York, 1959) p. 120 参照。又同様の事の指摘は Doris V. Falk, *Eugene O'Neill and the Tragic Tension* (New Brunswick, 1958), p. 5 になされている。
11. New York *Evening Post*, 13, 1926 に掲載, B. H. Clark, *Eugene O'Neill. The Man and His Plays* (N. Y., 1947) p. 105 参照